
けいおん! 超番外編「エリザベス!」

P'z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 超番外編「エリザベス！」

【Nコード】

N1946J

【作者名】

P・Z

【あらすじ】

クリスマスも近づいた肌寒い冬のある日、澪のベース、エリザベスが何者かに盗まれる。澪はエリザベスを取り戻すため一人、DQN達に挑むが律もそれに巻き込まれてしまう。冬の日に彼女達の話に起こる不思議なお話。

（前書き）

注意事項

- ・ 前作「超番外編『ギータ！』」と正確にリンクしています。そこ
らも見ているとなお良いです。
- ・ 前作同様、梓以外のメンバーはB・Zファン。
- ・ 時系列はアニメでの番外編「冬の日！」からそんなに経っていな
い時期。なので原作3巻で唯が零のベースにエリザベスと名付ける
話とは違うものと思ってください。
- ・ またまた擬人化です。

「おい……まだかー？」

「うん、ごめん。今行くー」

少女は「それ」をじっと見つめ去つて行つた。名残惜しそうに、「それ」をもう一度見つめて去つて行つた。

次の日も、その次の日も。少女は「それ」とにらめっこして去つて行く。

「いつそ買っちゃえよ……親に頼んでさー」

「でも……許してくれるかなあ……」

そんなやりとりがもう一週間経つ頃だろうか。

少女はまた「それ」を見つめていた。そして15分経った時に少女は意を決したような表情をし、近くにゐる店員に言った。

「う……うれくさい！」

少女は「それ」を手に持ち鼻歌を歌いながら帰路を辿る。

「結局親に前借りしたんだって？」

「ちゃんと大人になってから払う、て約束したからさ。でもよかった、他の人にとられないで……私……」

ついに買ったんだな

少女はうつとりと「それ」を抱えながら言う。

「はいはい。そんじゃ明日から早速練習するぞー！」

夕陽が沈んで行く中、少女二人は自分達の未来を夢見ながら夕闇に消えて行く。もちろん少女が購入した「それ」も一緒に。

彼女は知る由もない。「それ」は明日中には在庫処分として倉庫に
しまわれる事になっていた事を。何個もある自分と似たものから自
分を選んでくれた事にどれだけ「それ」は感謝していた事も．．．
．．．．．

「．．．．．ちゃん．．．．ん。みおちゃん．．．．．漣
ちゃん！」

漣「ふあっ!？」

秋山漣がその瞬間目にしたのは呆氣にとられる軽音部の仲間達だっ
た。

漣「．．．．．あ．．．．．私．．．．．

．．．寝てた？」

唯「うん。頬杖つきながらうつらうつらと。珍しいねえ、漣ちゃん
が居眠りしちゃうなんて」

梓「この寒いのによく寝れますね．．．．．」

紬「疲れてるのかしら？ 漣ちゃん」

律「それにしても大胆ですなあ、漣ちゅあん？ 寝言で『大好きだ
よ律う．．．』なんて言っちゃうなんて．．．．．」

漣「んな．．．．．っ!？ い、言ってないぞお
っ!！ 絶対言ってないっ!！」

律「あらあら照れちゃって？」

漣「．．．．．／／／／! い、言
ってないよね!? そんな事! 唯、ムギ! 梓!」

唯「うん」

梓「律先輩の妄言です」

紬「でも嬉しそうな顔はしてたわよ」

漣はさっきまで見ていた夢を思い出そうとしていたがさっきの会話

のせいで頭から離れて行ってしまった。しかし大したものじゃないだろう、と飲みかけだった紅茶を飲み干した。

超番外編「エリザベス！」

終業式も明日に控えたこの時期。軽音部こと放課後ティータイムは今日も今日とてティータイムとバンド練習に勤しむ。そして彼女らは談笑した後、バンドの練習にとりかかっていた。しかし一息ついた際に唯はぼろりと言った。

唯「そっぴや漣ちゃんのベースには名前つけないの？」

漣「え？」

いきなり突拍子のない事を聞かれ啞然とする漣。

唯「私のギ―太みたいにかわいい名前つけてないの？　きっとベー

スちゃんも喜んでくれると思うよお」

漣はこのベースを買ってから一度もそんな事考えた事はなかった。

確かにこのベースは自分にとって大事なもののだが、所詮楽器。名前をつけようなんて一度も思った事はない。

紬「いい機会だから今決めておきましょう」

律「そうだな、唯のギターにだけ名前あるのも何となく不公平だも

んな。えー．．．と漣の名前からとって．．．．．

．．．ミオミオ！」

漣「ヤダ」

紬「トクナガ」

漣「ベースと繋がりだろうけど日本人名はちよつと．．．．．

ー
律、紬、漣は次はお前だ、と言わんばかりに梓の方を向いた。

翌日。終業式の日。

漣はいつも通り、律とともに登校していた。

律「いやー、今日で2学期も終わりだなあ。明日から冬休みかあ」

漣「．．．．．来年から私達も3年生だなあ．．．．．」

律「そだなー。進路どうしよっかなー。まだ全然考えてねえや」

ビュウウウ。まだ見ぬ未来を語る漣達を嘲笑うかの如く、突如冷風が襲った。

漣「うう、寒い．．．地球温暖化って嘘じゃないのか？」

律「あはは。聡も前、似たような事言ってたな」

漣「聡、か。元気か？　ここんとこあまり会ってないけど」

律「元気元気。部屋からＡＶの音が漏れるほど元気だぞ」

漣「．．．．．／／／／／」

そんな他愛もない事を話している時だった。ドン、と漣に誰かがぶつかってきて、その衝撃で転びそうになる漣。

漣「あ！　わわ、わっ！！」

律「漣！！」

転びそうになった漣を支える律。それと同時に漣の後方を睨みつけ、律は怒鳴った。

律「誰だよ！！」

「は？　何わめいてんの？　ちょっとぶつかっただけじゃん」

そこにいたのは漣達と同じ桜高の制服を着た目つきの悪いいかにも素行の悪そうな女性徒であった。よく見ると後ろには似たような柄の悪い女が二人いてニヤニヤしながらこつちを見ていた。一人は金髪、もう一人は両耳にピアスをした茶髪の女である。

律「今のがちょっとぶつかった、で済むかよ！　明らかにお前からぶつかってきたじゃねえかっ！！」

漣「り．．．律．．．．．」

珍しく本気で怒る律、それをおどしながから見守る漣。

悪そうな女「うっぜ。言いがかりも程々にしろよ、バアカ。そのこけし女も大袈裟に倒れそうになってんじゃないよ、ったく」

すたすたと前を歩いて行く女達。言い返そうとした律だが、女達は今もう見えないくらいまで遠くに行ってしまった。

律「くっそお！あの制服、うちのだよなあ．．．うちの学校にもあんなのがいたんだな、やっぱ．．．．．」

漣「こ、こけし．．．．．こけし．．．．．」

漣はこけしと言われたのが余程ショックだったのかぶつぶつと何か呟いている。

律「．．．．．ダメだこりゃ」

終業式を終え、HRを待つ2年2組。

律「今朝さあ、すっげえム力つく女共に因縁つけられたんだ。あっちから漣にぶつかってきたくせに謝りもしねえの！うちの制服だったけどタイの色からして3年だったかな」

唯「ほえ」

紬「それって3年のDQN先輩（仮名）の事かしら？あの人、両親がPTAの委員長らしくてそれを笠にしてくかなり好き勝手してる、て。チンピラを何人が従えてカツアゲや暴行など相当悪い事してる、て。両親の方もガチガチの親バカであの人の悪行を訴えても『私の娘がそんな事するわけがない』と一点張りで、教師もクビを恐れて注意できないんですって」

唯「ふえ」

律「げ．．．そこまで嫌なヤツだったのか．．．じゃあさわちゃんに言っても無駄かなあ」

紬「さわ子先生も一教師だもの．．．PTAに意見できるほどの力はないわね．．．」

唯「はえ」

律「漣．．．小学校の時からいじめの格好の的だったからなあ．．．．．目をつけられてなきやいいんだけど」

唯「ほえ」

律「・・・・・・・・・・・・・・・・唯、さつきから聞
いてるか？ 人の話」

唯「もちろんだよお、いいアルバムだね『MAGIC』」

律「全然聞いてねえじゃんっ!!」

唯「えへへ、冗談だよ。でもりっちゃんがいるから大丈夫だよ。
子供の時からりっちゃんが澪ちゃんをいじめっこから守ってくれた
から、澪ちゃん今でもりっちゃんの事頼りにしていられるんでしょ
？」

律「・・・・・・・・・・・・・・・・ま、まあ・・・・・・・・よくあいつ
にたかるヤツらを追っ払ったりしてたな・・・・・・・・」

唯「澪ちゃんにはりっちゃんっていう正義のヒーローがいるから心
配いらないよお」はむはむ

暢氣そうにハムパンをくわえる唯。

律「て、照れくさい事言っなよお、唯！ このお!」でこぴーん
唯「ほにやつ」

紬「あらあらまあまあ／＼／＼／」

いつも通りの昼食タイムを過ごす唯、律、ムギ。しかしその後、唯
はぼそつと何かを呟いた。

律「？ 唯、今何か言わなかった？」

唯「えっ？ ・・・・・・・・ううん！ 何でもないよ!」

律「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

紬「そうだわ、さっきのDQN先輩んだけど・・・・・・・・」

一通り話した後、教師がやってきて冬休みの注意事項を述べ、終了
の合図と共に唯と律も含めた生徒達は席を立ち、遊びに誘う者から
明日からの予定を聞く者から騒がしくなった。

律「みーおー。今年最後の部活行こうぜえー」

唯、ムギは日直だったために教室に残り、一人で部活に行くのも嫌
だったので澪のいる1組に来た律。

漣「！！」
私、今日急用できちゃって
活行けない、ごめん！」

律を見た途端、慌てた漣は手を合わせて部活に行けない事を謝る。

律「ええ？ マジかよ。わかった。みんなにはそう伝えとくからさ」

漣「ごめん」

律「何言つてんだよ、いつもは私がサボッてばかりだし、たまにはいいじゃん。行つていだよ」

漣はそれを聞いて律の顔をしばらく見つめた後、颯爽と走り去って行った。

律「何か変だったな、あいつ」

漣が尋常ではない様子だった事を悟った律。もしかしたら家族が事故に遭ったのか、と考えるがそれを知る術もないので一人で部室に行く事にした。

そして着いた部室。律は部室の鍵を開け鼻歌を歌いながら部屋へに入る。

律「いつものまじか、この街に丸め込ま」

そして律は気づいた。部室内のとある些細な異変を。

漣「ハアハア」

漣は「LOVE PHANTOM」と書かれた古びたライブハウスの前に来ていた。そこは不良がうろつく繁華街で漣は周囲にいる柄の悪そうな連中にビクビクしながらもそのライブハウスの戸を開けた。

「遅かったじゃん」

そこには今朝会ったDQN女とその取り巻きのピアス女と金髪女がいた。

澪「・・・・・・・・・・・・・・・・！！ あ、あの・・・・・・・・・・！！
本当に・・・・・・・・私のベースは・・・・・・・・・・！！」

DQN女「ああ、あるよ。ほら、きつたないベースが」

女が指さした先には確かに澪のベース、エリザベスが。澪からは5m以上も離れている場所のボロボロのソファアの上に無造作に置かれていた。

澪「・・・・・・・・・・・・・・・・この紙に書いてある通り・・・・・・・・・・
誰にも言わずに一人でここに来ました！・・・・・・・・・・は、早く私のベースを返してください！！」

澪はポケットから紙を取り出した。その紙にはこう書いてある。

学校が終わったら 街の「LOVE PHANTOM」ってライブハウスに一人で来い。警察や誰かに言ったらお前のベースをぶっ壊すからな。 DQN女

今朝、澪の机の中にはこの紙が入れられており、律や和にも相談できなく、大切なベースを壊されたくない澪はその紙の指示に従わざるを得ず、今の状況に至っているというわけである。

澪「・・・・・・・・・・・・・・・・そのベースは・・・・・・・・私の大切なものです！返してくださいっ！！」

DQN女「はあ？ あたし、ここに来たらベース返すなんて一言も書いてないけど？ 文字読めないんですか、軽音部のお嬢様は」
冷酷な笑みを浮かべるDQN女。

澪「な・・・・・・・・・・！！？」

DQN女「あたし達を楽しませたらあれを返してあげる。・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・そろそろ来る頃かな・・・・・・・・・・？」

意味がわからず困惑する澪。すると澪が入ってきた扉が開き、ぞろ

ぞろとこれまた目つきも素行も頭も悪そうな男達が10人くらいはやってきた。

漣「ひえっ!!」

漣は男達を見て飛び退いた。

DQN男1「おお、DQN女ー。もしかしてこのコオー？　うちらとやりたいってのは？」

DQN男2「うっほ!!　マジパネwwww髪なげえwwwwマジで好みなんですけどwwww」

DQN男3「最近つまんねえ事ばっかだったからな……」
明らかに危なげな会話に漣も危機感を煽られずにはいられなかった。ぞつと背筋が凍る想いがした。

金髪女「そおだよぉ。そのこけし女、あんた達とハメまくりたいらしくってさぁ」

ピアス女「まだ処女だから存分に楽しめると思うよ。処女のくせにレイプされたいとかマジ変態だしwwww」

漣「えっ!!!!??」

漣の嫌な予感は的中した。この女達は自分をレイプさせる気だと。

DQN男2「マジで!?　俺、絶対中田氏するwwww」

DQN男4「バアカ。胸に出してこそいいんじゃないか。何でてめえはそれがわからねえんだ」

DQN男5「俺、顔射派」

漣は男達の会話で頭がおかしくなりそうだった。

DQN女「こいつら全員と相手したらあのベースも返してやるよ。ま、そいつら底なしだからね……いつまでかかるかわかんないけど。もしかしたらずっと満足してくんないかもね、アハハハハッ!!」

漣「や……やだ……嫌!!嫌あ!!　いやあああつ!!」

漣は泣き叫びながら壁際まで走る。しかし男達はじりじりと漣を追い詰めてくる。男達はざつと10人。それだけの人数の中逃げ切れ

るわけがない。

DQN男6「フヒヒwww嫌がる姿もそるwww」

DQN男7「おい、DQN男9、10。ちゃんと入り口見張ってるよ」

DQN男9「ちつ、後回しかよ...」

DQN男10「その分楽しませてくれよ」

澪「や、やだ...!! 助けて... 助けて...」

その時澪の頭に浮かんだのは、小学生の時にいじめられていた自分と、それを真つ先に助けに来てくれた少女の姿だった。そして澪はその少女の名を叫んだ。

澪「律ーーーーっ!!!!」

DQN男10「どわっ!! 何だてめっ!!」

律「澪おおおおおっ!!!!」

入り口を見張っていたDQN男9、10の間をついて颯爽と現れたのは、まさにその少女が成長した姿である、律であった。その手には鉄パイプが握られている。

澪「...!! 律っ!!」

涙ぐんだ澪は律の名を叫んだ。そして律は周辺を見渡した。泣いている澪を取り囲む男達、それを遠くから高みの見物をしているDQN女達。

この状況を把握できないほど律もバカではない。

律「...!! てめえらあ...」

凄む律。

DQN男8「何なの、この女。うぜ」

DQN男7「知り合いつばいし、友達だろ」

DQN女「……………そう。こけし女と同じ軽音部のやつだわ。何でもここがわかったんだよ？ まさか……………」

漣を睨むDQN女。ひっ、と怯える漣。

律「違う、自分で気づいたんだよ。部屋に行くとき漣のベースがなかったもんで……………漣、帰る時にはベース持ってなかったし、部屋にわざわざ取りに行って帰ったんだったら鍵なんかかけると思えなかったし……………で、今朝会ったお前らが奪ったんじゃないかと思ったんだよ……………3年の人や街であんなら溜まつてる場所を聞き出して、もしかしたら、思ったんだけど……………やっぱ漣をイジめんのが目的だったわけか……………」

……………!!」

金髪女「へー、すごい。バカそうに見えたけど頭回んじゃない」

ピアス女「そうでーすwwwwwwそのクソ生意気なこけしをボロ雑巾みたいに犯させるのが目的でーすwwwwwwウケルwwww」
律「っざ、けんなあああっ!!!!」

鉄パイプを構えて漣のすぐ側にいるDQN男1に突っ込んで行く律。

DQN男1「うおっ!! あぶねっ!!」

律の振り回す鉄パイプを躲すDQN男1。男1が怯んだ隙に律は即座に漣の手を握って駆け出す。

律「逃げるぞ! 漣!!」

漣「律! ダメ! エ、エリザベスが……………! あそこに……………」

にやにやとこちらを見ている女達の座るソファーの上にはエリザベスが置かれている。律はくそっ!と舌打ちし、全速力でソファーへと駆けるが。

次の瞬間、律は宙を舞った。しかしそれは一瞬で次は顔面に激痛が走った。

律「っあっ!!」

DQN男3「……………そう、簡単にうまくいくと思って

んのか．．．．．？」

走る律の足をDQN男3の足がひっかけた事で律は顔から転倒したのだった。腕だけで立ちあがろうとする律。打ったのは自慢のおでこであった。

律「いつ．．．．．た．．．．．！！！」

額をさする律。そして律は気づき、愕然とした。転んだ拍子に溲の手を離してしまったのだ。さらに溲は男3に捕まってしまった。

溲「り、律う．．．．．！！ だいじよ、もがつ！！！」

口をおさえられる溲。

DQN男3「．．．．．あきらめろよ。この人数だ。女2人じゃどうしようもねえよ」

DQN男4「やあゝりいゝ。ナイス、3。そんじゃ獲物も確保できたし、さらに獲物が1匹増えたしい。お待ちかねの乱交パーティーと行くかあ？」

DQN男7「おい、こっちの友達の方もヤツちまっついていいんだろ？」

DQN女「．．．．．構わないよ。こけし女に見せびらかして。その方が楽しそうだし」

溲（う．．．．．そ．．．．．！？ 律までっ！？）

溲は絶望した。自分を助けに来てくれた律まで巻き込んでしまった事に。無力な自分に。

涙で顔がぐちゃぐちゃの溲。それを見た律は。

律「．．．．．安心、しなよ．．．．．
．．．．．こんなバカ共にやられるほど私は．．．．．

．弱い女じゃねえ、よっ！！」

再び鉄パイプを振り回す律。しかしこの状況じゃ不意打ちなどできず、周りの男達は律を嘲笑うかのようにすいすいそれを避ける。

DQN男2「おっほwwwこえっwwwまじこえwww」

DQN男8「いやーん、死んじやうーやめてー．．．．．てかあっ！！」

そう言って律の鉄パイプを軽く掴む男8。

律「うあつ．．．!!」

漣（ダメ．．．．．!! このままじゃ、このままじゃ律が．．．!! 律が．．．!!）

漣は自分の口をおさえてる男3の手を振りほどいて、女達に顔を向けて叫んだ。

漣「お願いしますっ!! 私が、私だけなら何でもします!! この人達の相手でも、先輩達の好きなようにしていいですっ!! だから、律とエリ．．．ベースだけは解放してくださいっ!! お願いしますっ!!」

律「．．．．．み．．．お．．．!! 何言って．．．．．」

漣「律が．．．律がひどい目に遭うより．．．全然いいから．．．!! 律とエリザベスが無事なら．．．．．」

漣「それで．．．．．」

DQN男7「．．．．．甲斐甲斐しいねえ。自分はとうなつてもいいから友達だけは、てか」

DQN男8「泣ける話だねえ。で、どうすんのDQN女」

金髪女「．．．．．どおーすんの？」

顔を強ばらせ漣を睨んでいるDQN女。

DQN女「．．．．．DQN男1。

そこの鉄パイプ取って」

DQN男1「あ？ あ、ああ．．．．．」

男1にさっきまで律が持っていた鉄パイプを持たせるDQN女。男1がそれを拾い手に持つのを確認するとDQN女はエリザベスを自分の前に無造作に放り投げた。

漣「な．．．．．!!？」

DQN女「それでこのベースぶっ壊して」

漣の耳には悪魔の声が囁かれた気分であった。しかしそれを聞いて怒鳴ったのは律であった。

律「てめえっ!! 何でだよっ!! 漣はお前との約束果たしてこ

ここまで来てんのにつ！！ 何で漑の大事なベースを．．．．．
．．．！！」

DQN女「何にも知らないくせにうつさいんだよ、でこ。あたしは最初にあたし達を楽しませたらこれを返す、て言っただよ？ このこけし、まあたいい子ちゃんぶりやがってるから、興醒めしたの。楽しくない。だから壊す。わかった？」

律「そんなバカな話あるかよっ！！！」

漑「．．．．．！！！！！！！！！！ やめてえっ！

！ 何でもしますっ！！ 何でもしますからあつ！！ エリザベスを壊さないでええええっ！！！」

律と漑の悲痛な叫びが木霊する。

ピアス女「何ベース如きに名前つけてんの、キモｗｗｗｗｗｗ」

DQN女「．．．．．！！！！！！！！！！ だったら、選ばせてあげる。このベースをとるか、そっちの友達をとるか。選びなよ。選んだらどっちか離してあげる。ただ、どっちみちあんたは何でもする、て言っただからこいつらに犯させるけどね」

律「そ、そんなの．．．．．！！！！！！！！！！ そんなのって！！」

DQN女「まあ、選ぶまでもないと思うけど。ベースなんてただの楽器だし。金ありやまた買えるじゃん。こんなもんのために友達売るなんてしたら、あんた恨まれてもしょうがないよ？」

漑はもう絶望で頭が真っ白になっていた。しかし今のDQN女の言葉は耳に入っていた。

「．．．．．」そうだ。確かにエリザベスは所詮楽器だ。別に血が通ってるわけでも心があるわけじゃない。お金さえあればまた別のベースを買えばいいだけなんだから。

でも律の体は。律はこの世でたった一人だ。律の体を取り返す事なんて絶対にできない。私の大事な親友を楽器なんかのために失いた

くない。楽器は所詮、物。律は人間で親友だ。秤にかける事はない。律にはいつも助けられてた。なら今度は私が助けてやらなきゃ。

ごめんね、エリザベス。私は唯みたいに楽器を相棒だとか、人間のようには思えない。所詮は音を出すだけの道具なんだから。律のために、壊されて。今度はもつといいのを買うから。だから……………

澪は静かに頷いた。

DQN女「……………それって、ベース壊していい、て言ってるの？」

また頷く澪。

DQN女「……………だつて。男1。壊しちゃつて」

DQN男1「……………へいへい。ヤリに來ただけなのに面倒くせえ事になったな、ったく……………」

すたすたとエリザベスに近づく男1。

律「澪！！私はいからっ！！澪っ！！あのベース……………エリザベスはっ！！お前の相棒だろっ！！あいつだつて代わりはきかないお前の大切なパートナーだぞ！？澪っ！！澪おおおっ！！！」

澪「……………律の方が……………大事だよ……………」

涙でくしゃくしゃになった顔で精一杯の笑みを見せる澪。しかし、その目はまったく笑っていないかった。突如、ぐいつと髪をひっぱられた。澪を捕まえているのがいつの間にか男3から金髪女に変わっていた。

金髪女「ほら、よぉーく見てなよ。あんたが見捨てた相棒とやらの

た。

それと同時に漣は駆け出していた。エリザベスを庇うように自分の体で覆いかぶさった。

ゴガンツ

男1がふりかざした鉄パイプは地面に叩きつけられ鈍い音を響かせた。

エリザベスに向かって飛び込んだ漣は間一髪、エリザベスを抱えたまま滑り込んだのだ。

漣「う．．．．．いつ．．．．．たっ．．．．．!」

滑った際に両足を擦りむいてしまいその痛みに耐える漣。

DQN男1「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．あらら」

そう呟いて次の指示をもらうかのようにDQN女の方を見る男1。

DQN女「．．．．．．．．．．．．．．．．おい、てめえ。何やってんだよ。お前はベースぶっ壊していい、て言っただろ？　なに何で今更そのベース庇ってんだ、こら。ああ、じゃああの友達のでこ女は犯されてもいいんだあ？　いいよ、じゃああんた達。そのでこもこけしも、犯って」

DQN男8「うっひよ、二人共頂いていいって」

DQN男7「もったいぶらせやがって．．．．．」

指示を出され律に群がるDQN男達。そしてDQN男1がしゃがみこんでる漣に近づいてきた。

DQN男1「じゃあ君もそんなとこいないでこっちに．．．．．
．ぶべえっ!？」

突如マヌケな叫び声をあげる男1。顔を近づけてきた男1に漣は思いつきり頭突きを食らわせたのだ。

倒れる男1。それと同時に全速力で律を押さえ込んでる男5の元へと走っていく。突然の事態に対処し切れない男達は漣をあっさりと通してしまふ。

漣「ええええいつ！！！」

ドガッ！！と漣は男5に渾身のタツクルを決めた。

DQN男5「おうわっ！！」

漣よりも図体がでかい男5だがそれでもタツクルを食らえばそれなりに吹っ飛ぶ。そして漣はエリザベスを肩にかけて、律を腕を肩まわして抱えだした。

律「み……………お……………」

漣の突然の行為に周囲のDQN男達はもちろん律まで驚いて開いた口がふさがらなかった。

漣「律っ！！ 逃げよう！！ ここから、逃げよう！！ こんなヤツらの好きにさせないっ！！！」

いつもの漣とは思えない強い口調と顔つきに律はまた驚く。

DQN女「待てコラアッ！！ ベースとるかダチとるか、て言っただろうがっ！！ そんな勝手なマネ許されると思っただのかっ！！？」
怒鳴るDQN女。

漣「勝手なのはお互い様だろ……………！？ でも……………先輩。

あなたの言う通り、その選択は選ぶまでもなかったですよ……………

」

DQN女の気迫にも負けてない漣はDQN女を睨みつけたまま続ける。

漣「私には律も！ エリザベスも大切な存在だっ！！ 秤にかけるまでもない、かけがえのない……………私の『親友』だっ！！
！ ならどっちも助ける事ができるなら、どっちも守るっ！！」

そう叫んで律を抱えたまま走る漣。

DQN女「ざっけんじゃねえっ！！！」

DQN女がそう叫んだ時には既に漣のすぐ近くまで走ってきていて漣の顔を思い切りぶん殴っていた。殴られた漣はそのまま地面に倒れ込む。

律「漣っ！！」

同時に倒れて漣の名を叫ぶ律と、ガツン、と音を立てて床に落ちるエリザベス。

そして漣の髪を鷲掴みにしてそのまま持ち上げるDQN女。

DQN女「．．．．．そんな都合のいい選択肢があると思ってんのかコラアッ！！　てめえ、そこまでいい子ぶりにえのかっ！！　？　世間知らずなガキが何偉そうな事いつてやがんだっ！！？　あぁっ！！？　本気でそんな理屈で世の中渡っていけると思ってたのか、クソがああああッ！！！」

怒鳴りながらDQN女は漣の顔を殴りまくる。ガツッ、ドガツ、という音がライブハウスに響く中、男達はDQN女の気迫に負けてただ黙って見ているだけで、他の女二人もDQN女が何故あそこまで感情的になってるのかわからず啞然としている。

律「やめろ．．．．．やめて．．．！！　やめてっ！！　やめてくれっ！！　やめてくれえっ！！！」

律は何度も叫んだが、DQN女は漣を殴るのをやめない。動こうにもさっきの腹のダメージがあつて動けなかった。そして実際にDQN女がその殴る手を止めたのは数十秒後であった。

漣の体はダラン、とDQN女の手から垂れ下がっている。顔も痣だらけで鼻血がボタボタと出ており、唇も切っており床に血が落ちる。右目は腫れ上がってしまい、潰れたも同然の顔となる。

DQN女「．．．．．わかったかよ？　いい子ぶろうとほざくとどんな目に遭うか．．．．．」

息を切らしながら漣を見下すDQN女。

漣「．．．．．」

しかし漣の目は屈していなかった。残された左目でしっかりとDQN女を直視している。その目はさっきまで、暴力と恐怖に支配され怯えていた漣とはまるで違うものだった。それがDQN女をさらに苛つかせた。

澪「．．．．．私は．．．．．律
と．．．エリザベス．．．．．私の親友を．．．．．絶対
に助けます．．．．．」

その眼差しのまま澪ははつきりとそう言った。

DQN女「．．．．．！！　もういい！！　お
前ら！　何もたついてんだ！！　早く犯せつ！！　ベースもさつさ
とぶつ壊せつ！！　このクソバカ女の全てをメチャクチャにしるお
つ！！！」

わめくDQN女。そして倒れていた男1が復活し澪の髪を掴むのを
交代した。

DQN男1「．．．．．いつてえ．．．．．歯ア
欠けちまつたじゃねえかよ．．．．．どうしてくれんだよ．．．
．．．．．この代償は俺のナニをくわえて払ってもらおうじゃねえ
かあつ！！！」

完全にキレている男1。

DQN男5「よーやくレイプタイムの始まりー」てか

DQN男6「フヒｗｗｗ怯えてる顔も良かったけど気丈な顔もそ
るｗｗｗｗ」

DQN男7「そんじゃオレもフェラしてもらお」

カチャカチャとズボンを脱ぎ始めるゲス達。

律が叫んでいるが澪の耳にはもう何も届いていなかった。

しかし澪は小学生の頃の事を思い出していた。いじめっこに苛めら
れていた、あの時を。そして一人の少女に助けられたあの時を。

「澪はホント泣き虫だなー！　そんなだからいじめられるんだぞ
ー」

「うえー．．．．．ん．．．．．だって．．．．．みんな．．．

．．．」

「泣ーくーなー！ 勇気をもって立ち向かえばな！ あんなやつら
漣だつてやつつけれるんだぞー！」

「無理だよお．．．男の子にかつなんてえ．．．」

「お父さんが言つてぞ！ 勇気をだせば、友達も助けにきてくれる、
て。おまえが泣いてばかりじゃ、だれもおまえを助けようなんてし
てくれないんだ、て」

勇気を出せば、みんなが力を貸してくれるって。

律。 エリザベス。

私。 絶対にこいつらに屈しない。絶対に負けない。だから．．．

．．．私にほんの少しの力をください。ほんの少しの．

．．．勇気をください．．．

．．．

男１「げべええっ！！！」

男１は吹っ飛んだ。 5 m 以上は吹っ飛んだ。

漣の髪を鷲掴みにしていた男１が何故吹っ飛んだのか。この場にい
る全員が理解できなかった。しかしそれはほんの一瞬で、次の瞬間
にはその理由がわかった。

漣の目の前には、何者かが立っていた。黒いノースリーブのヘソ出
しのシャツと、フリルのついた黒いスカート、変わった形の髪留め

で四本の長い髪を携えている170cmはあるであろう長身の女性である。その目は周りにいる男達をギリりと睨みつける鋭い目つきであった。

この女が男1を殴り飛ばしたのだ。

漣「……………え……………」

……………」

律「……………な……………に……………」

漣も律もまったく知らない女であった。突如現れたこの女に漣達もただ愕然としていた。

DQN男5「……………!!!!!! おいつ!!! 男9、10!!! てめえら、ちゃんと見張れって言ってるだろうが!!! 何、2回もあっさり通してんだつ!!!」

DQN男9「……………え……………!?! いや……………そんな女……………全然通ってねえぞ……………!?!」

DQN男5「何言ってるんだつ!!!? 現にここに……………」

……………」
と言いかけていた男5だが、次の瞬間には女は一瞬にして男5との間合いを詰めていた。

DQN男5「ひつ……………!?!? ぶ、ぶがああああつ!!!」

そして女は男5の顔を鷲掴みにしそのまま後頭部を地面に叩きつけた。

DQN男8「……………!?!? な、何なんだてめええええつ!?!」

女は男8の問いに何も答えず、ただその野獣のようなぎらついた目で睨みつけている。

DQN男6、7、8「上等だコラアアアアッ!!!!!!」

男達は3人いつぺんに女に襲いかかった。漑と律も3人がかりではどうしようもない、と思っていた時だった。女はしゃがみ込んで円を描くように右足を回転させた。それに足をひっかけられた男達は当然、足が地面から離れ宙を約1秒間だけ舞う。

DQN男6、7、8「・・・・・・・・・・・・・・・・へっ？」

そう呟いた時には3人それぞれに腹に超強力な蹴りを叩き込まれ

DQN男6「おこえっ!!」

DQN男7「げばふっ!!」

DQN男8「どぼこっ!!」

と各々にマヌケな叫び声を出しながらぶっ飛んでいった。

DQN男9「な、何なんだよお前はああああっ!!!」

そう叫んでナイフを取り出した男9は背後から女を刺そうとする。人が刺されるシーンなど見たくない漑は目を逸らそうとするがそれには及ばなかった。

女は振り向く事なく男のナイフを持つ手をあつさり受け止め、そのまま合気道のように腕をひっくり返して地面に叩きつけた。

DQN男9「ごぼおっ!!」

さらに倒れている男9の股間に女はかかと落としを決めた。

DQN男9「べぎやばがばああああああああっ!!!」

今まで聞いた叫び声よりも数倍強い悲痛の声が響く。男性諸君にならこの気持ちは文字通り痛いほどわかるであろう。泡をふいて倒れる男9。

DQN男3「・・・・・・・・・・・・・・・・いい加減にしとけ、てめえええっ!!」

男3は女に真つ向からつつこんで正拳突きを繰り出すが、それをさりと横へと躲す女。そして、無防備となっているその腕の関節を右足の膝と右腕の肘で挟み込んで潰した。

DQN男3「ぐああああああっ!!!?」

関節を潰された男3は激痛に悶え叫ぶ。しかし叫ぶ男3は次の瞬間に女の上段回し蹴りで吹っ飛んで行った。

DQN男2「・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！　じょ、じょじょじょ冗談じゃねえっ！！　俺はタダで犯れるって言うから来たんだっ！！　こ、こんなクソ強え女いるなんて・・・・・・・・冗談じゃねえよおおっ

！！」

男2は出口に向かって逃げだしていた。

DQN男10「ちょ・・・・・・・・男2！　ま、待ってくれよおおおっ！！」

男10も男2に続いて逃げて行く。

しかし、女はそれを許さなかった。男2人の足より数段速いその足はすぐに2人に追いついていた。

DQN男2、10「ひ、ひいいええええっ！！？」

そして再び上段回し蹴りを繰り出す女。

DQN男2「わ、悪かった！　も、もうこんな事しませんからべはっ！！」

DQN男10「ぐええっ！！？」

蹴り飛ばされる男2に巻き込まれて男10も吹っ飛んで行く。そして2人はそのまま女3人の元へとぶっ飛んで行き、白目を向いて気絶してる情けない姿を晒す。

金髪女「ひいっ！！？　ひいいいいいっ！！！」

ビビりまくってる金髪女。女達はこの謎の女が現れてからはただ呆然と見守るだけであった。否、何が起こってるのかさえ3人にははつきりと理解できていなかった。女の電光石火の如く、男10人を1分足らずで1人でなぎ倒した超絶格闘技に漣と律でさえ目を丸くしているだけだった。

男達は全員急所をくらい気絶して倒れ伏しているだけだった。その屍（と言っておく）を取り囲んで立つ女の次の標的はDQN女達で、女達をギロリと睨みつけている。

金髪女「こ、ごめんなさいごめんなさい！！ わ．．．私は悪くないですっ！！ ぜぜ全部、このDQN女がやるう、て言い出した事で．．．．．！！！」

ピアス女「そそそうつ！ こ、こいつが私達を無理矢理誘って．．．私達イヤだったんだけど．．．．．！！！」

DQN女「てめえら．．．．．！！！」

女にビビッてDQN女に責任をなすりつける金髪、ピアス女。所詮頭の悪い女の集団はこんなものである。しかし女はそれで許す気はまったくないらしく、睨み続けている。

金髪、ピアス女「い、いやあああああつ！！！」

その眼光に耐えれなくなった女二人は逃げだす。もちろん女はそれをさせず、俊足で2人の前に現れ2人の後頭部をガツシと掴むと、お互いの顔を勢いよくぶつけた。

金髪女「ぶへっ！！！」

ピアス女「ぎゃばふっ！！！」

お互いの顔を潰しあつた二人は仲良く倒れ気絶した。そしてついに残されたのはこの事件の元凶であるDQN女だけとなる。

DQN女「ひ、ひ．．．．．ひい．．．．．！！！」

有無を言わさずDQN女へとつつこんでいく女。

漣「待つて！！！」

漣の声が響いた。

その声を聞いた女はすぐにDQN女の目の前でピタツと止まった。

漣「．．．．．助けてくれて．．．．．

ありがとうございます．．．．．でも．．．．．その

人に聞いておきたい事があるから．．．．．」

女は漣のその言葉を聞くとすんなりと下がっていく。

漣と律もよろめきながらもDQN女へと近づいて行く。そして間近

ベースやってたんだってね。バンド友達と一緒に」

それを聞いて顔を強ばらせるDQN女と驚く漣。

律「でも．．．あんたの親は古くさい頭の持ち主らしいから、バンドなんて不良のやる事だ、て言つてあんたからベース取り上げて壊したらいいね．．．．それからあんたは親に隠れて悪どい事ばかりするようになつたって．．．．」

DQN女「．．．．．そうだよ．．．．．

私だつてベースが好きだった．．．．バンドが好きだった、音楽が好きだった！．．．．．でも私の現実は甘くなかつたんだよ．．．．あのクソ親父共のせいで、私には選択肢がなかつた！好きな事やれなくなつた．．．．．！！」

DQN女は初めて涙を見せた。ボロボロと涙が床に落ちていく。

DQN女「あの時から。私は家でもろくにあいつらと話はしなくなつて．．．．．街に出てあの男達みたいのとつるんで．．．．．憂さを晴らした．．．．．でも．．．．．気は晴れなかつた．．．．．寄ってくるのは犯る事しか考えてないあのバカ共だけで．．．．．でも私はベースを弾く事もバンドする事もできなくなつて．．．．．」

漣に顔を向けるDQN女。

DQN女「そんな時．．．．．1年前の学園祭であんたらの演奏を見た．．．．．私を差し置いて楽しくやつてるあんたらが．．．．．無性に憎たらしくて、悔しくて．．．．．羨ましくつて．．．．．同じベースのあんたが一番．．．．．気に食わなくなつて．．．．．なるべく関わらないようにしていたのに．．．．．いつも楽しそうにしてるあんたらを見たら．．．．．．．．．どうしようもなくなつた．．．．．」

漣「．．．．．それで．．．．．

．今日、こんな事を．．．．．」

女「．．．．．自分にはできない事を平然とやれる漣達に嫉妬した．．．．．て事だな」

ここに来て女が初めて口を開いた。女に視線を集める澪達。
女「．．．．．そんな事．．．．．口で伝えればいいじゃないか、バカが。親には自分のしたいように生きさせる、澪達には自分もバンドがしたい、て。自分の想いが伝わるまで何度でも何度でも言えいいじゃないか．．．．．」

女「あんたらは私達と違って、いつだって相手に気持ちを伝える事ができるんだから」

どこか寂しげな表情で女はそう言った。

DQN女「う．．．うあ．．．わあああああああ
んっ！！！」

それと同時に子供のように泣き崩れるDQN女。

そしてかける言葉も出ずそれをただ、見つめる澪と律。

女「．．．．．反省したか？」

頷くDQN女。

女「だつたらちゃんと見え」

DQN女「．．．．．ぐずつ．．．．．
．．．悪かった．．．．．本当に．．．．．ごめんなさい
．．．．．ひつく．．．．．」

小さな声だったが、DQN女の口からは確かに謝罪の言葉が出てきた。

それを聞いた澪と律は。お互いの顔を合わせて、ニコツと微笑む。

女「じゃ、歯ア食いしばれよ」

DQN女「．．．．．え」

ゴスッ！！

女の鉄拳がDQN女の顔に炸裂し吹っ飛んで行った。

DQN女「他人を傷つけた分は自分も味わえ。それが贖罪ってもんだ」

白目を向いて倒れるDQN女。もう許してあげようか、的な雰囲気だった中のまさかの行動だったのだから口を開けている漣と律しかし、これで漣達を傷つけようという者はこの場に一人もいなかった。

律「．．．．．漣。大丈夫か？」

とりあえず漣の無事を確認する律。

漣「り．．．．．っ．．．．．ふえ．．．．．う．．．．．うわああああんっ！！ 律ううううっ！！」

箍が外れたように律に抱きつきながら泣きじゃくる漣。

漣「うわああああんっ！ 律．．．．．よかった．．．．．無事でよかったよお、律ううううっ！！ うわああああんっ！！」

もはや人目も憚らず泣きまくる漣。よしよし、と頭を撫でる律。

律「バカ．．．．．お前の方がひどい怪我じゃねえか．．．．．鏡見てみるよ、ひっでえ顔だぞ」

漣「．．．．．いいよ．．．．．私．．．．．律がひどい目に遭う方がずっと．．．．．ずっと嫌だから．．．．．うっうっ．．．．．ふやああああんっ！！」

ゴンッ！！

漣「いたあっ！？」

泣きじゃくる漣の頭に突然の鉄拳がおりた。

女「泣くんじゃねえよっ！！ うっとおしいっ！！ 私はすぐにわんわんと泣くヤツがでえっ嫌いなんだよ！！」

鉄拳の主はもちろん、あの謎の女であった。

漣「ちょ．．．．．何するんですかあ．．．．．！！」

女「うるせえっ！ あんたはなっ！！ もうちつとシャキツとする

べきなんだよ！！ 昔っからぴーぴーぴーとっ！！」

漣「ひ、ひえええっ！！？」

女の気迫と顔に怖れをなす漣。正直な所、さっきの男達やDQN女よりも数倍怖かった。

律「ちよちよちよ……………落ちついてよ、二人共……………」

て、そういや……………あんた誰？ それに昔からって……………」

漣と律がさっきから抱いていた当然の疑問を投げかける。

女「……………さあね。あんたらが一番知ってる事だろそれは」

またさっきのような寂しげな表情を見せる女。そして再び女の口が開き、その言葉が終った瞬間。

バタンツ！！

「大丈夫かつ！？ 君達！！」

突然、ドアが開き警察が大勢も駆けつけてきた。

「うわっ！？ 何だ、この様は！？」

「生きてるのかっ！？」

警察が倒れてる男達の生死を確認して連行していく。突然の事態に再び啞然とする漣、律。

警察「いや、ここで友達が暴力事件に巻き込まれてる、と通報があったんだよ。君達が襲われていたという学生だね？ さあ、早く行こう。君達！」

しゃがみこんでる漣達を立たせ外へと連れて行く警察達。

警察「女子高生2名、安全確保しました！」

律「2名、て……………もう一人いるでしょう！？ あの背の高い……………」

振り返る律。しかし、そこには誰もいなかった。ただ床に落ちているエリザベスが置かれているだけである。

律「あ．．．．．れ．．．．．？」

漣「うそ．．．．．あ、あの人は．．．．．？」

警察「．．．．．誰もいないぞ。被害者は君達2名だけだと聞いてるぞ？ さあ、早く！」

外へと出た漣と律。しかし、二人は安心した事でどつと披露と痛みがよみがえり、意識が遠のいていく。何事かと集まる外野達の中に唯、ムギ、梓もいて漣達を見つけては急いでこちらへと走り寄ってきてもその時には二人の意識がなくなっていた。しかし、気を失う前に二人は確かに小声で言葉を交わしていた。

漣「．．．．．ねえ、律．．．

．．．．．」

律「え．．．．．？」

漣「．．．．．エリザベスって．．．．．さっきから

あそこにあつた．．．．．？」

律「．．．．．わかん．．．．．ない．．．．．

．．．．．よ．．．．．」

エリザベスを運び出した警察を見て漣が思った疑問。

そして律もまた気を失う際に唯があのに呟いた言葉を思い出していた。

唯「漣ちゃんにはりっちゃんっていう正義のヒーローがいるから心配いらないよお」

律「て、照れくさい事言っなよお、唯！ このお！」でこぴーん唯「ほにゃっ」

紬「あらあらまあまあ／＼／＼／」

唯「それに．．．．． 澪ちゃんにはもう一人、守ってくれる人がいるもんね」

シヤリシヤリ、という音が聞こえる病室。

そこにいるのはベッドで横たわる澪と律、そしてリンゴの皮を包丁で剥いている唯であった。

唯「私、入院してる人のお見舞いに来てリンゴ剥いてあげるの夢だったんだあ」

澪「わかったから、包丁、気をつけてくれよ．．．」

唯「わかってるって」。ムギちゃんとあずにゃん、もうちょっとで来るはずだからそれまで私が話し相手になってあげるよあ」

あの事件から翌日、澪と律はあの後、入院した。律は蹴られた衝撃で内蔵にやや支障がきたしていたが、適切な処置を施され大事には至らなかった。澪の顔も絆創膏と包帯だらけで、右目には眼帯がつけられている。

ちなみにあの時に何故、警察が来たのかと言うと。律が昨日、澪の危機を察知し学校を飛び出した後、それをたまたま見ていた和が教室の日直の仕事を終え部室でのほほんと待つ唯とムギにその事を伝え、二人も律を捜しに学校を飛び出し、通行人などにおでこの広い女子高生がいなかを尋ね回ったところ、ようやく見つけたところが、古びたライブハウスでそこには悪そうな男達に囲まれていいようにされている澪と律がいた。慌てて飛び出そうとした唯を静止してムギは、警察にも顔がきく父に電話してすぐにこのライブハウスに警察を手配するよう頼んでおいた、という事である。

律「ムギには感謝しなくっちゃな。あの後、警察が来てくれなかったら私達、あそこでずっとのびてただけだったし」

漣「そうだな。．．．．．」

すっかり元気になった漣と律は唯と談笑しあう。しかし漣は少し違った。

漣「．．．．．あなさ．．．．．ゆ、唯。．．．

唯「何？．．．．．」

唯に何か聞きたがっている漣。しかし言いにくい事なのかなかなか切り出せないでいる。

漣「．．．．．何でもない。とにかくありがとう。ムギと一緒に私達を捜してくれて．．．．．」

唯「うん！ 私も漣ちゃんとりっちゃんが無事でホントよかったよ！」

結局話をやめた漣。しかし律には漣が何を聞こうとしたのか、何となくはわかっていた。いや、確信を持っていた。

それ以前に漣と律は別の疑問を抱いていた。何故、唯はさっきからライブハウスで助けてくれたのが誰なのか聞こうとしないのだろう。漣と律は警察には知らない人が助けに来てくれた、と供述し、

あのDQN達もそう言っていたらしい。

なら、その人物が誰なのか聞いてきそうなものだが、唯はその事についてまったく聞こうとしてこない。二人には唯がそれが誰なのかわかっているような、そんな気がしていた。そして、漣が聞こうとしていた事、それは律も唯に聞きたい事であったが。その内容とは。

ギー太が人間になって助けにきた事がないか？

思いあたる節はあった。数ヶ月前の文化祭が終わった後の、唯が痴漢に襲われた事件。あの時も唯は何者かに助けられたような様子だったが、唯はそれについてまったく触れようとしなかった。いや、

それが誰かわかっている上でもうこの話はしないようにした雰囲気だった。まさに今の唯と同じような感じに。

そして何故、漣と律がこんな疑問を抱いているかと言うと。

自分達を助けてくれたのはエリザベスだったんじゃないのか？

これも思いあたる節がいくつもある。DQN男9、10が出入り口を見張っていたのにも関わらずあの女は急に現れた。それはあの女が既にあの場にいたから。

漣を以前から知っていたかのような口ぶり、髪留めの形がベースの弦を留める部分に似ていた事、服の色合い。胸と腹にあった傷。これは漣がエリザベスを机の角にぶつけた時の傷、と考えられる。そして

「あんたらは私達と違って、いつだって相手に気持ち伝える事ができるんだから」

このセリフの意味。そして律が聞いたという唯が呟いた

「それに．．．．．漣ちゃんにはもう一人、守ってくれる人がいるもんね」

唯にはわかつていたのか。漣にはエリザベスという守護者がいる事を。かつて自分が危機に陥った時のように、それが人の姿を借りて現れる事を――

漣、律「ばかばかしい．．．．．」

二人同時に呟いた。そう、そんな事があるわけがない。女が急に現れたのはそう見えるほどあの女の動きが早かったから。あれだけの格闘技を扱えるのだからそれができてもおかしくない。外見が似ていたのもたまたま。あのセリフは何か別の意味が込められている。唯が何も聞いてこないのは気を遣っているか、何も考えていないか。それしかないだろう。楽器が人間になって助けにきてくれる？ そ

んな非常識な事があるものか。あの女も通りすがりの親切な空手の達人なんだろう。

そう思う事にした。それ以上深く考えないようにした。

いや、そういう事にした方がいいと思った。

漣と律にはあれがエリザベスである、という確証はあった。そして、かつて唯を救ったのもギー太であろう事も。しかし、それを誰にも言う気はない。自分達だって半信半疑のこの話を誰も信じてくれないだろう。

二人はこの事は自分だけの胸にしまっておいた方がいい、と判断したのだ。

紬「ごめんなさい、遅くなって・・・」

梓「大丈夫ですか？ 律先輩、漣先輩・・・」

漣と律があれこれ考えてるうちにムギと梓が到着した。

律「よあ、ムギ！ 梓！」

紬「体の調子はどう？ お見舞いのマスクメロン持ってきたわ」

おもむろに高級そうなメロンを取り出すムギ。軽く1万は越えそうなそのメロンに庶民であるこの場の全員がゴクリと生唾を飲みこんだ。

漣「い、いいのか？ こんな高そうなメロンを・・・」

紬「いいのよ。二人の無事をお祝いしての事よ。遠慮しないで」

律「それじゃ遠慮せずごちそうになりまっす！！」

紬「それとね・・・あのDQN先輩と仲間の二人。退学ですって」

梓「PTAの親はどうなったんですか・・・？」

紬「それがひどい話なの・・・今回の事で首が危なくなつたあの親は娘とはもう勘当しているから、自分達とは無関係だ、と言って責任逃れしたらしいの。だからDQN先輩は身よりも何もなく少年院行き・・・DQN先輩も悪い人とはいえ、あんまりよ・・・」

」

漣「……………いや、それでいいんじゃないのかな……………」

紬「え？」

漣「これであの人…………PTAの娘、て肩書きも鎖も外されて、好きな事をできるようになったんじゃないのかな…………ちゃんと罪を償った後にベースでもバンドでも…………自分のやりたいように生きられるようになったんじゃないかな……………」

律「……………そうだな」

二人はDQN女の泣き顔を思い出した。

紬「……………そうだね。最後にDQN先輩。こう言っていた、て」

DQN女「罪を償ったら真っ向から、あの親に自分の気持ちをぶつけてみる」

律「……………あの人の言葉が効いたんだな……………」

」

漣「……………うん」

あの時のあの女、エリザベスの言葉が脳裏に浮かぶ。

「あんたらは私達と違って、いつだって相手に気持ちを伝える事ができるんだから」

楽器である彼女には人間である漣達に想いを伝える事なんてできない。ベースが自分の事をどう思ってるかなど、漣は考えた事もなかった。

しかし、何がきっかけかは知らないがあの時、エリザベスは人の姿を借りて自分に会いに来てくれ、自分を救ってくれた。そして漣の事をどう思ってるかもはっきりと口にしてくれた。

彼女がまた自分の前に現れてくれるかは定かではない。だから漣はエリザベスの分もその想いをぶつきたいと思った。それは親友の律にでも、仲間の唯、ムギ、梓にも。勇気を持って自分の想いを伝える事の大切さをエリザベスは教えてくれた。そして漣は呟く。

漣「私も本当に感謝してるよ。エリザベス」

警察が来る瞬間、あの女は確かに漣に向けてこう言った。

エリザベス「でも．．．泣き虫で弱虫なあんたでも．．．あの時、私を選んでくれた事は本当に感謝しているよ、漣」

漣、律、が入院して1週間後。 12月30日。

唯「うーいー。早く来なよお」

憂「ごめんね、お姉ちゃん。はい、豚肉」

律「うはっ！ うまそー！！」

憂「今日は漣さんと律さんの退院祝いの鍋パーティーなんだから遠慮せずに食べてください」

紬「私、こうやってみんなとお鍋を食べるの夢だったの」

和「私までいいのかしら．．．部外者なのに」

唯「いいんだよお。今年色々あってクリスマスパーティーはできなかったもんね。あ、もちろんギー太も一緒だからね！」

梓「ちゃんとエプロンつけてある．．．」

和「．．．それにしても．．．漣。」

何でベースを持ってきてるの？ 演奏会でもするのかしら？」

漣「え．．．．．！！　そ、それは．．．．．」

漣「私の．．．．．『親友』だからだよっ！！」

和「．．．．．」

ムギ「．．．．．？」

梓、憂「親．．．友．．．」

きよんとしてるムギと梓と和と憂。

漣は真っ赤な顔をしながら律を見た。そして律もそれを見てニカツと笑う。唯は漣の気持ちを察しているかのように静かに微笑んでいる。

律「よし！　軽音部とその仲間達も全員いる事だし、始めようぜ

ー！！」

唯「おーっ！！」

紬「今年も色々楽しかったわあ．．．」

さわちゃん「あらあら、ムギちゃんまで年寄りくさい事言っちゃって．．．」

梓「．．．．．うわっ！！　先生、いつのまにいたんですかつー！！？」

漣「また勝手にあがりこんだんですか．．．．．」

さわちゃん「あんた達がドタバタしてて今年のクリスマスは一人で寂しく過ごしちゃったからじゃないのっ！！　今日は飲みまくって、コスプレさせまくってやるわよっ！！」

漣、梓「．．．．．勘弁してくださいよ．．．．．」

律「．．．．．ま、まあ、いいじゃん！　そんじゃ乾杯しようぜっー！！」

唯「せえーの！」

「かんぱーーーーいつ!!」

楽器をとるか友達をとるか。それは秤にかけるまでもない友情。その友情を壊させまいと、自分の大切な物を傷つけさせまいと、人の少女が勇気を出した事で生まれたひとつの物語であった。

おわり！

（後書き）

とづくに出来ていたんですが年末の内容になっていってしまったので、リアルタイムにあわせて年末に公開しよう、と思い温めていました。物語の自然な流れとしては前作の方が気に入っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1946j/>

けいおん! 超番外編「エリザベス!」

2010年10月21日23時00分発行